

北南
太平記國會

友為
正成
圓心

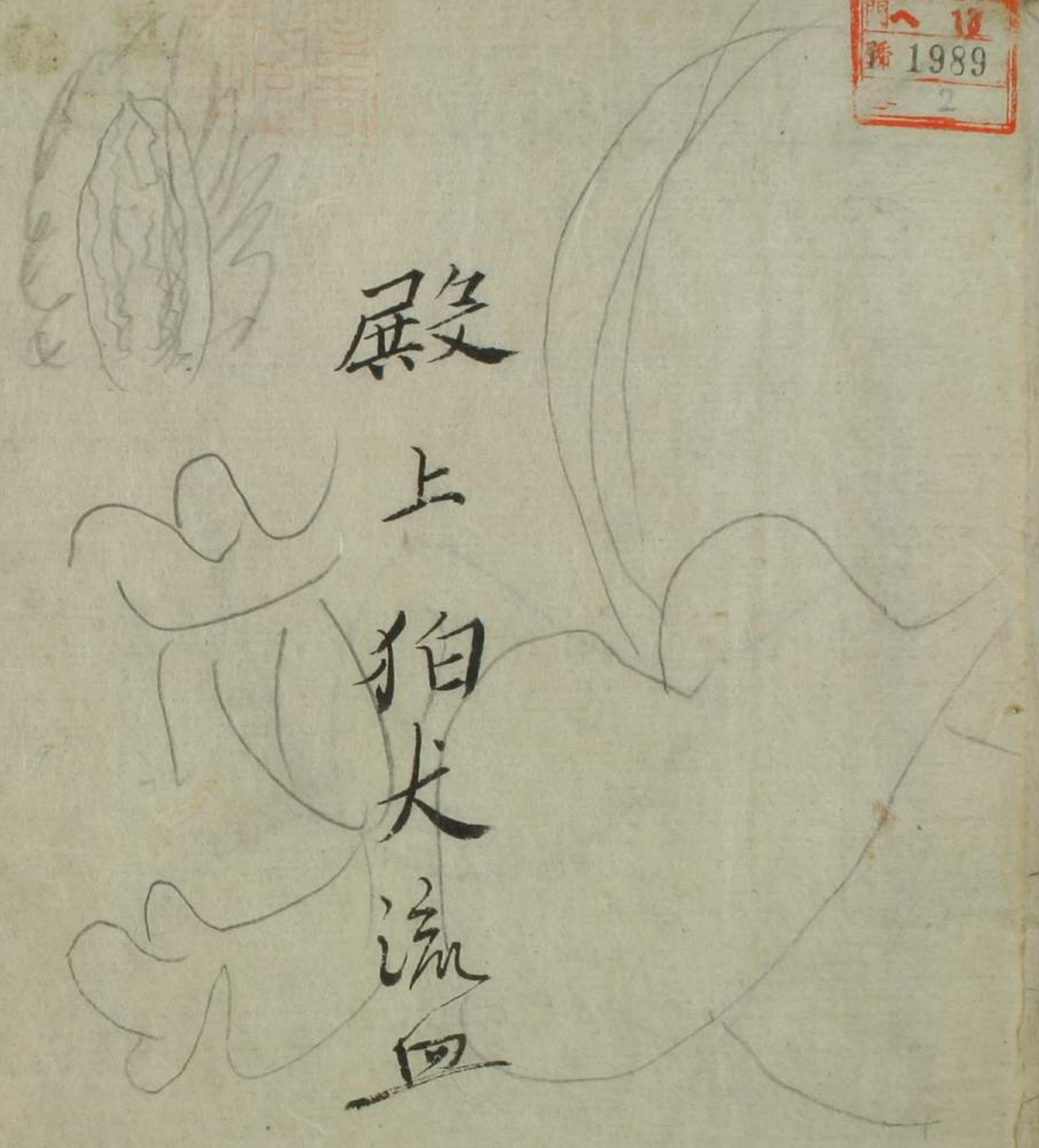
親王
護良

1989
2



門へ 12
番 1989
2

殿
上
狛犬流血



南北太平記圖會卷之一

初篇

卷之一目錄

天小殿上狛犬流血破裂南北
天小狼籍鳳闕為賴伏白双
元亨元亨帝即位期太平
正后正后無寵准后得幸
八宗八宗起競欲排禪宗
清涼清涼殿通翁伏諸講師
偽籠偽籠居俊基廻諸州
催無催無禮講察謀鎌倉
曳妻曳妻愛賴負變心



頼貞國長死急軍
資朝俊基下向鎌倉
讀御告文利行蒙神罰
主上行幸南都北嶺
中原章房横死清水寺

南北太平記圖會卷之一

初篇

殿上狛犬流血破裂南北

狼籍鳳闕為頼伏白刃

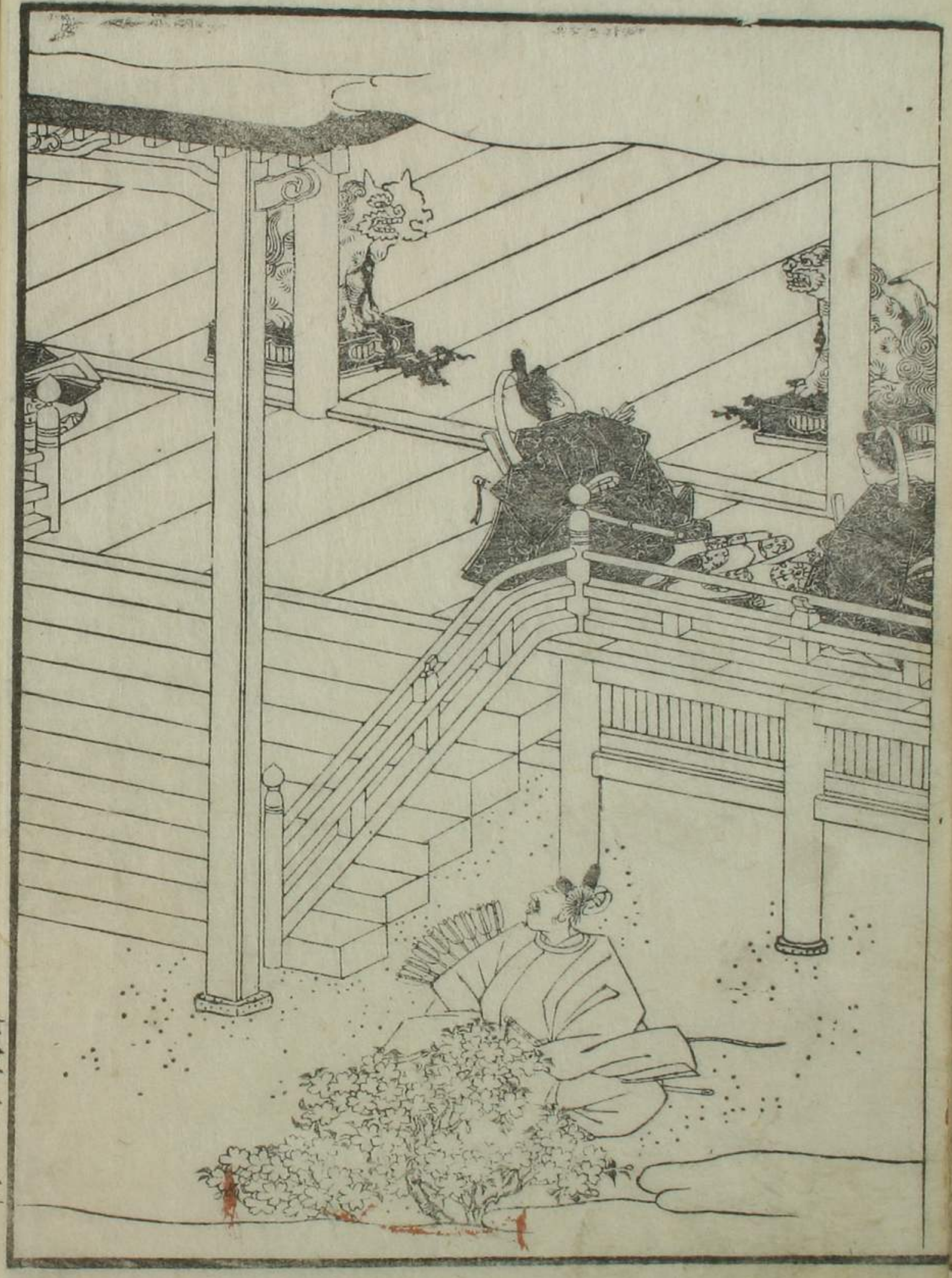
夫人君小三の職り材と量て官と授是也功と議て賞を加ふ是二也罪を明めて罰を行ふ是三也。されば材は長短あるが故に官は能く否あり功は高下あるが故に賞は厚薄あり罪に大小あり故に罰は輕重あり。此三者ハ人主の心を用へる所なり。吾皇國神武天皇より九十五代の帝と後醍醐天皇と申奉り一旦鎌倉北條の乱逆を静めりといへども治世の叡慮淺くすして楠正成が材と量りずして官と進み新田義貞が功と議して賞を薄し。足利尊氏が罪を明しせずして罰を加へず。然も准后の御口入に迷ひしが故に四海再び大に乱れて一日も安らぎなば。狼烟天と翳翳鯢波地を動かし事四十余年一人として春秋不富事

と得ず万民手足と措ふ所也。情其濫觴と尋れハ其禍帝一朝一夕の
故ニ匪ず元暦年中右大将頼朝卿平家と誅罰して其功有りの時
後白河院厭感の餘ニ六十六箇國の総追捕使ニ補せり。従是武家始
て諸州ニ守護と立庄園ニ地頭と置頼朝卿の長男左衛門督頼家卿次
男右大臣實朝公相續て征夷將軍の武將ニ備り是と鎌倉三代將軍と
號く然る頼家ハ實朝の爲ニ討き實朝ハ頼家の子惡禪師公曉が爲
ニ弑せられて父子三代僅に四十二年にして断絶す此時ハ臨んで頼朝卿の
男北條遠江守平時政の男陸奥守義時自然と天下の推柄と執勢
漸く四海と覆んと欲す時の太上天皇ハ後鳥羽院當今ハ順徳院より武
威下ニ振ハ朝憲上ニ廢り事と歎き思召て義時と亡んと謀りハ既
ニ承久の乱起て遂ニ旌旗日と掠り京鎌倉の兵平守治勢田ニ相戦
ふ其軍一日も休むして官兵忽ニ敗るバ後鳥羽院ハ隱岐國ニ遷され

の順徳院ハ土佐國ニ遷されりハて義時弥ハ荒と掌ニ握り位四品
の上と越すとども政事悉く武家より出で徳六窮民と撫威万人の上より
承久以来義時が議ひして儲王攝家の間に理世安民の器ニ相當り
りハ貴族と二人鎌倉ニ申下し奉りて征夷將軍と仰武臣皆拜趨の禮
と事と守同三年ニ始て維中ニ兩人の一族と居て兩六波羅と號し西國の
沙汰と執行セ京都の警衛ニ備ふ又永仁元年より鎮西一人の探題と
下し九州の成賊と司とせり異賊襲來の守と堅すされバ一天下其下知ム
不随とりハ處もろく四海の外も均しく其推勢ニ敵するカ如し朝陽不犯とも
殘星光と奪り習われハりれり武家より公家と蔑ふ仕奉りより
ねども自所ハ地頭強くて領家ハ弱く守護重んじて國司ハ輕し此故
ニ朝廷ハ年々衰へ武家ハ日々盛なりより代々の聖主遠くハ承
久の衣襟と休め近くハ朝議の陵廢と歎き思召てりハ東夷と亡マ



殿裏の
 狛犬の
 裂て
 血を流し
 南北よ
 分る
 図

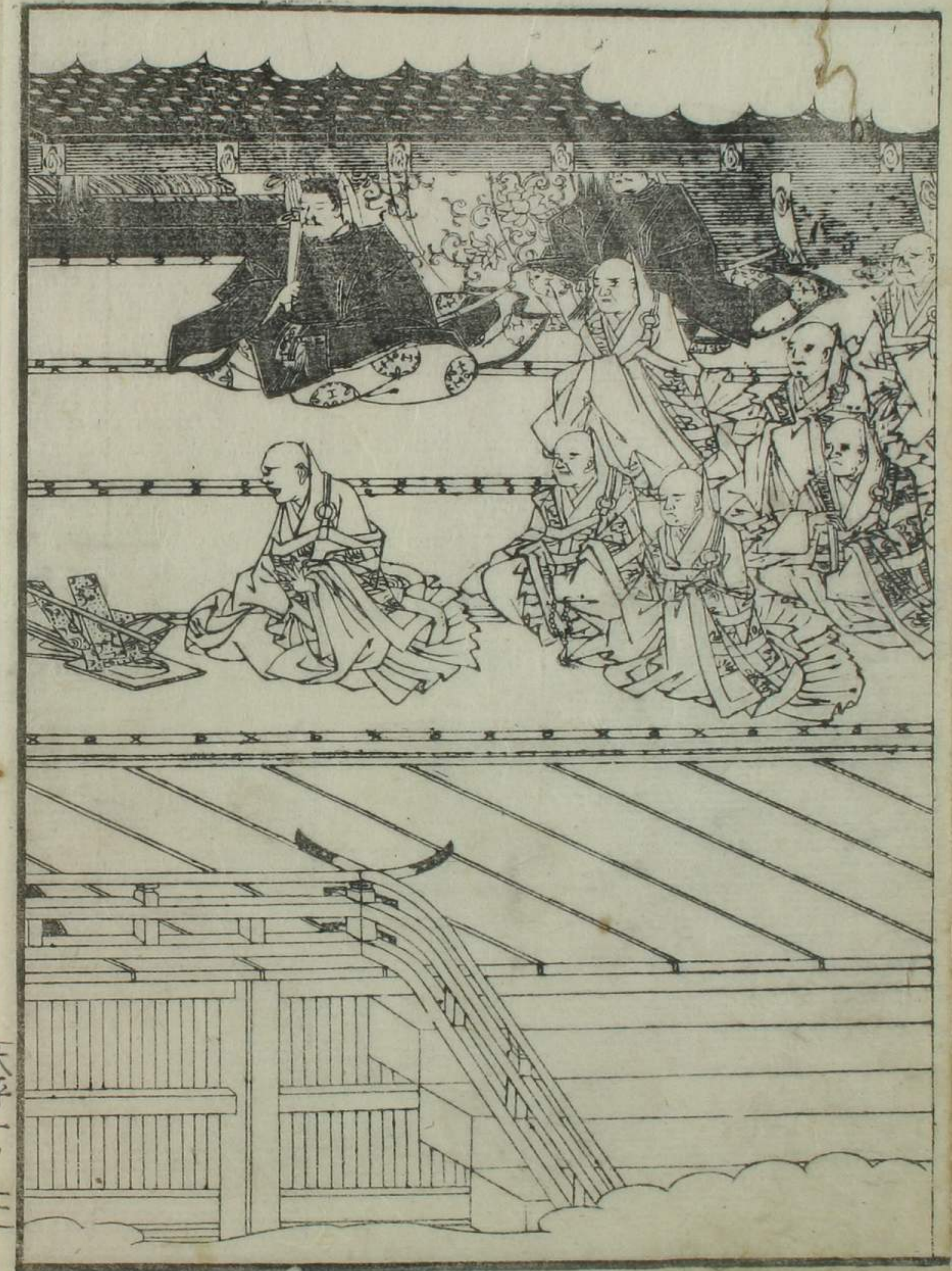
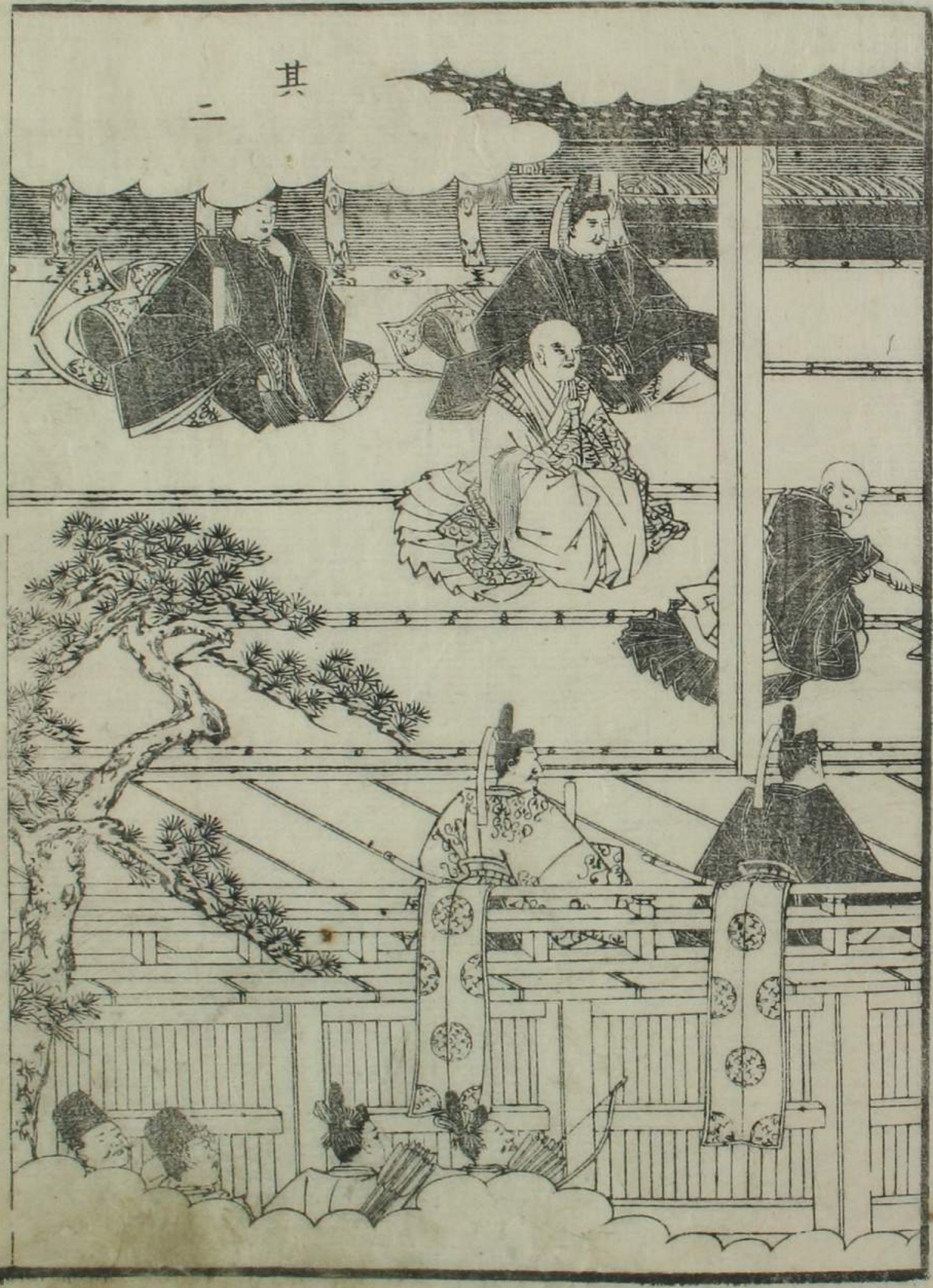


いふと常小叡慮を惱しめしむ。或ハ勢ハ微して事不契。又ハ時
いふに到りて黙止のゆる。後鳥羽院より五代の天子と経て後嵯峨
院の朝ふ當て北條左馬權頭時宗帝統と二は分ち。天威を弱め奉しん
為に此已後ふ於てハ後嵯峨帝の皇子。後深草院龜山院御兄弟の
皇孫御互ふ代々御位ふ即せり。へま旨固恒禮と定めたる。然も後深
草帝正元元年御位と下居さる。ひて本院と稱し奉り。龜山院文永
十一年御讓位在て中院と申奉り。後宇多帝弘安十年帝位と下ら
まひて新院と稱へ奉り。時中院新院の両上皇北條權ふ募て恒
禮と定め。恣ふ皇祚と改め。後事と憤さる。何卒北條の類を亡し
御躬の御子孫一流と以て。永く日の本の寶祚と嗣せんと思召る。ハ
内マ寵臣三條宰相中将實盛卿。容詔と仰合さる。其頃の主上
ハ後深草帝第二の皇子とて伏見院と申奉り。此帝の正應三年三

月四日。何の故よりして紫宸殿の木獅子。おのれと南北二は裂て血を
流し。くれ。あて唯事ふら。じと思ふ處。同じ。十日の曉甲斐源氏の
族。浅原八郎為頼と。つゝの長男太郎。次男小八郎。其外良寺。二入
相徒へ馬。乗せ。右衛門の陣より。禁庭。馳入。殿上。登り。て晝
の御座夜の殿。で踏穢し。宿直の侍門々の番士等と。挑戦。散々。小
箭。射。懸。逐。り。力。盡。て。深。殿。に。蒐。入。御。南。の上。座。と。組。腹。一。文字。よ
搔。切。て。俯。伏。ふ。こ。を。卧。り。く。る。嫡。男。太。郎。も。紫。宸。殿。に。昇。り。て。腹。を。切。
賢。聖。の。障。子。御。帳。の。帷。に。腸。を。投。つ。け。て。死。な。れ。バ。次。男。小。八。郎。大。床。の
下。に。て。腹。を。切。臟。腑。を。攫。出。し。手。に。持。た。り。息。絶。さ。り。二。人。の。郎。等。も
既。に。討。れ。ぬ。死。骸。ハ。其。儘。禁。外。へ。曳。出。し。六。波。羅。へ。を。渡。し。く。る。後。為。頼
が。射。り。く。る。箭。を。見。り。皆。卷。際。に。大。政。大。臣。源。為。頼。と。漆。を。以。て。書。け
ら。天。晴。希。代。の。曲。者。う。り。く。り。此。一。條。ハ。龜。山。上。皇。の。御。結。構。之。三。條

宰相實盛卿は密計を仰舎り。内々浅原八郎為頼は宣命の
已り。為頼隱謀を企て當今と失ひ奉る。北條と追討せんと其用
意及り。所子隱謀既し六波羅は露頭し。早討手の大勢向し
其聞あり。為頼俄に思ふ。此乱行ハ及らる。許り。為頼
が佩る太刀ハ則三條實盛の家は傳り。處の名刀と云。其沙汰
られ。程に六波羅より宰相中將實盛卿同侍従公文朝臣
を召埔て結問し。中院新院の兩上皇永祚の御志在て。為頼は宣
詔し。明白と云ふ。因て六波羅より本院は奏達し。中院新院遠
國遷寺の事を請じ奉る。然ども本院嘗て許り。中院新院の兩
上皇も大に驚き怖り。御誓書と鍾倉小賜ひ。聊異志と云は
さ。陣論し。鍾倉殿中の諸士評定の上御誓書
及び三條宰相實盛父子を朝廷に献し奉る。事種くよぞ静る。

然れども承久以後御代々御本意を達し。御鬱憤はかめてハ
い。晴り。す。年と経る。處。時政九代の後亂前相模守平高時
入道崇鑒が代に至て天地命と草し。厄機此は顯る。情往古
を引て今高時を行跡と視。累世の繁榮は。上君の徳は。乘
下臣の禮と失ひ。朝憲と蔑し。諸士と看事芥の如く。倭人と愛し。驕
奢日夜は。超過し。人望は。背きて。民の愁を思ひ。色は。荒酒は。長じて。
前列と地下は。羞し。朝暮は。奇物と翫びて。傾瘵を生前に致さん。守
彼衛の懿公が鶴を乗し。樂も早盡。奉の李斯が犬を牽し。恨も今
よ来り。ん。是と見者眉を顰。聽人唇を翻す。時の帝は。後醍醐天
王と申奉る。相模守高時が。御年三十一。御位は。即奉
る。此帝は。後鳥羽院の御後胤。龜山院の皇孫。後宇多院等
二の皇子は。御座る。承久正應の御志を。継り。遂に北條征伐の



しく赤土のふして青苗は。餓草野は満飢人街は倒る。此年錢三百
と以て粟一斗と賣君遙は天下の飢饉を聞名て宣く是朕が不徳
あり。天子一人を罪すべし萬民何の咎有て。此災は遭るごと。自帝徳
の天小背り事と嘆くや。朝餉の供御を止れ。飢人窮民の絶行よ
引れ。有難くは是も猶黎民の飢を助くべし。非ずとて檢非違
使の別當小仰て。當時富祐の輩が利倍の爲は積畜る米穀と點檢し
て。二條の町は仮屋と建檢使自断て其直と定ふと賣與する人。因
て商賈ともに利を得て人皆九年の畜ありが如し。又祈禱の者あり。時
君下の情上よ達する事やうんと。記録所は出御成て直に祈
と聞名明らる。理非と決断しし。いづか。虞芮の祈忽は停て。刑
鞭も朽くと凍鼓も撃人があり。滅は理世安民の政若機巧よ
付て是と見ば命世亞聖の才とも稱しつべし。惟恨らくハ元弘の後よ

おのてハ。睿慮齊桓覇と行ひ。楚人弓と遺れしよ相似る事と是則
草創雖并一天守文不越三載所以うべし。時よ文保二年八月三日
後西園寺大政大臣實魚公の御女后妃の位よ備て弘徽殿よ入る
給。則此家より女御とよめられ。今よ至て已ふ五代なり。是も承
久已後北條代々西園寺の家を尊崇せしよ因て。萬は其威強く西
園寺一家の繁昌恰も天下の耳目と驚すや。君も鎌倉の聞
可然と思食て取分立后の御沙汰も有り。御齡已ふ二八にして
金雞障の下よ冊りて玉樓殿の内よ入給へば。天挑の春と傷。粧ひ
垂柳の風と含り。御形毛媵西施も面と耻。絳樹青琴も鏡と掩ふ
程る。君の御覺も定て類ひつじとて。ふ。君恩業
春の日の暮難きと歎。秋の夜の長き恨よ沈。されば金屋よ

人無くも皎くも残燈の壁に背く影董籠り香消て蕭々たる暗
雨の窓を打声も皆物毎に御泪を添煤と成りける。人生勿作婦人身
百年苦樂因他人と白樂天が書けるも理ありと覺る。其頃安野中將
公廉朝臣の女に三位殿の局と申ける女房中宮の御方と候りけるを
君一度御覽せられて。他は異る御覺りて三千の寵愛一身より
くろ六宮の粉黛ハ顔色をさう如くして都て九嬪世婦後宮の美人
樂府の妓女とども。天子顧聘の御心と附らる。三位殿の局よおる
てハ唯殊艶尤態の獨能是を致のそより。蓋善巧便佞獻旨先
とて奇と争うくハ花下の春の遊月の前の秋の宴も。駕すれば輦
共みし座すれば席と共みし。是より君王政は急り。寵幸のつ
て忽准後の宣旨と下され。人皆皇后元妃の思ひとや。驚
見光彩始て門戸に生ずる事と。此時天下の人男を生事と輕く女を

天平一十九

生事と重き。されば御前の評定難祈の御沙汰も。准後の御口
入といへ忠をささる者も賞を賜ひ。理りる者も非は落實に關雖樂而不
淫哀而不傷。詩人採て后妃の徳と稱するは是なり。嗚呼悲哉傾城傾
國の乱爰は兆と覺る。中にもや。姦斯の化行めて皇后准後の
外君恩に誇り宮女追くふ多うり。れむ宮に次弟に御降生らつて
十六人を御座る中にも第一宮尊良親王ハ御子左大納言為世祖の
女贈從三位為子の御腹とてこれをし。吉田内大臣定房公養君に仕
奉り志學の歳始り六義の道長じ。さるる富緒河の清流を
汲浅香山の故跡を踏て嘯風弄月。御心を傷けり。第二の宮も
同じ御腹して總角の御時より。妙法院の御門跡に御入室有て親門
の教を受さる。瑜伽三密の間ハ亦教道數奇の御翫び在り。も
高祖大師の舊業も。取す慈鎮和尚の風雅も。劣らる。第三

宮ハ民部卿三位殿の御腹より。御幼雅の時より利根聡明なれば。君御位にハ此君ハ社と思食。既ハ春宮の宣旨よりしうと。北條高時詔を拒で御治世ハ後深草院と龜山院の御皇孫代く持せりべしと。後嵯峨院の御時恒例既ハ定りし上ハ今度の東宮ハ持明院殿の御子邦良親王と立べき旨と執計の慮申も任せざり。くれむ御元服の義を改られ。梨木の御門跡ハ御入室有て承鎮親王の御門弟と成せり。尊雲親王と申る。此宮一と聞て十と悟り。御器量世よごひなりし。一實圓頓の花の匂いと荆溪の風。董三帝即是の月の光と玉泉の流。浸しり。されハ消うんとす。法燈と挑げ。絶うんとす。惠命と継ん事。只此門主の御時より。一山掌と合して。悦の九院首と傾けて仰奉り。然れども君ハ此皇子と東宮よ。立られ。ざり。車と御遺恨。小思召り。より。始て御隠謀の御

催し。但ハ一大事の御企され。賢老智化の臣におのて嘗て色も出し。り。深き聖慮を知奉り者ハ。僅ハ大納言師賢卿。中納言資朝卿。と一兩人ハ。過さる。り。第四宮も。た。ま。じ。御腹。し。て。是。も。聖。護。院。二品親王の御附弟と。な。り。せ。り。ハ。法。水。と。三。井。の。流。ハ。汲。范。列。と。尊。の。曉。ハ。期。し。り。ハ。此。外。儲。君。儲。王。の。選。之。竹。苑。椒。庭。の。備。滅。ハ。此。君。王。業。盛。大。の。御。運。福。祚。長。久。の。御。基。時。到。り。と。見。ゆ。り。

八宗起競欲排禪宗

清凉殿通翁伏八宗

此君ハ。禪の宗旨と好す。せ。り。ハ。南。浦。紹。明。禪。師。の。高。弟。通。翁。鏡。圓。和。尚。と。御。依。在。て。萬。壽。寺。より。南。禪。寺。に。移。住。り。し。時。ハ。御。參。禪。在。て。普。照。大。光。國。師。の。號。を。賜。ひ。崇。信。他。ハ。異。り。し。り。と。他。宗。の。諸。講。師。に。れ。を。そ。の。如。す。と。り。し。の。ま。し。時。ハ。洗。心。子。玄。慧。も。台。徒。と。り。を。以。て。禪。の。宗。要。と。排。せ。んと。謀。り。諸。宗。毎。ハ。牒。し。合。し。稟。れ。々。ハ。八。宗。の。群。徒。



後基
 朝臣
 諸國
 順見
 軍營
 要害の
 地理と
 窺ふ
 圖



競ひ起つて。朝闕は牒訴する事敷回なり。因て主上止事を以て
元亨三年。南都北嶺寺門東寺の諸講師は勅して。清凉殿に於て
通翁和尚と對辨し。若勝と採事と得ば望み任せて。禪宗を滅却す
べしと。被仰出され。諸講師大に喜ひ勇る。此時通翁和尚ハ會重
病は罹て起座不能といへども。關繫の重と吾宗の滅するハ替がじ
として強て病とすけて。治は應じ申され。吾も代て。諸宗は對揚
すべし程の侍者と召つれ。由々鋪大事なり。急禁闕
ふ奏し申され。様ハ勅淀の趣。謹んで奉て。ひひ畢ぬ。而も臣僧鏡
圓此頃重病は罹て且夕の程とあらず。然といへども。吾宗の一大事に
て。いへハ速くふ參殿可仕とて。但一人股肱の侍者と召つれ。とく
は所折節會下不可然者。と不覺ひ。臣僧の法身は宗峯の妙。超
と申者のひが。先師南浦和尚の祀列を蒙て。後ハ身と乞巧の中

に逃れて聖體を長養仕ひし。承て。い。これ者と尋出。い。す。で
の所對辨姑。延引被下度旨と願ひ稟され。主上此旨を聞食。急
有司ふ命じて宗峯の行衛を探らし。有司命を奉て。此彼と其
ゆえと尋やるといへども。更其跡とあらず。り。くれ。心は一つの手段と
案じ。洛中洛外より。とあ。ゆる。乞巧と五条の橋上。召集。瓜の漬
物と施行す。べき。し。と觸り。り。る。小數多の乞巧喜びて。皆五条の橋
上ふことを集り。此時宗峯ハ世と遁れて。維邊は徘徊。夜ハ
東山の雲居寺の軒に。禪定し。晝ハ四條五條の橋上。橋下。元座
してあり。ら。が。或時の口号ふ
座禪を。四條五條の橋の上。往。人。と深山木。あ。て
とハ吟。申。され。既。瓜の施行と聞て。此日多くの乞巧。混じて
同。く。五條の橋。し。す。の。れ。る。有司乞巧の悉く。集。と。す。ら

て申渡しける様ハ佯等ノ今凡と施典す。佯等此施物と兩手ふりず
して清取べしと有りければ。渚の乞丐心驚きて更ふ答ふる事不能口
と閉て居たりける。遙のうしろふ扣る乞者一人声と揚て有司手
つぎして渡しり。我等も手につぎして受申べしとぞ呼りり。有
有司其辞の凡たりざるを見て其乞者とめへふ止め。其余の乞者に悉
く施物とくして離散せしむ。彼乞丐と清とて問て曰師ハ宗峯妙
超ふつりや。乞者曰我左様の者ふり。司曰今の即答唯者とハ
不覺必ず其身を隠し乞ひ事なれ。此度俱舎法相三論成實
華嚴戒律法華真言の諸講師競ひ起て禪門と破却ん事
敷祈す。因て近日清凉殿して宗論闘話と試る上めて其制
度あるべしとて。南禅寺通翁國師ハ勅宣を下しり。西小折節
國師疾ハ罹つて其身穩かす。然れども勅命の重きと吾宗の

得失放下しがさる故。強て病を扶て是非ハ参殿つんと有り。但し
法弟宗峯首座の行衛と求め。侍者として昇殿と遂さる趣勅答。
つりふ因て如斯執計所なり。師逸く已前ふ敏て参殿つりざんむ。
禅法の破滅此時有り。乞丐憤然としていへく。今ハ何ぞ乞申さん。
臣僧則ち宗峯より。速く法兄通翁國師ハ随ハ一臂の活手
假と施さずんば吾宗地と拂ふふ至んとして。直ハ南禅寺ハ趣
通翁國師の侍者として元亨四年改元在て 正中元年正月廿一日。禁闕ハ参
内せしめり。因茲ハ宗の碩徳數百人清凉殿ハ列座。一言の下ふ
於て齟面ハ禅宗と破却せんと言唾と吞て整へり。時ハ通翁和
尚最静ハ奏し申さる。様今聖上ハ對して宗旨と度量す。應ハ
直問直答して繁辞と假べく。長問答を以てハ宗といへとも又ハ
大覺世尊の遺法ハ譬負墮するとも。宣其宗と滅すべけんや。吾宗





見
玄慧法印
昌黎文
集溝
淡之
圖



見
韓退之
雪中
赴潮
州
圖

曰禪も得て聞つべきや

以心傳心より禪も
口で説くとより

通翁曰近前來你々為道

著せん ちかく来れ其方が
為道著せん

希聖則ち進で前小至る通翁立ちつて希

聖と一踏ふ踏倒す希聖不覺起揚て禮拜す

希聖もさる者なれば
其心と悟り不覺起揚

爰ふ於て諸講師もおれじく弟子の禮を執て通翁國師

と三拜し則ち國師及び侍者宗峯と送つて南禅寺小至る通

翁一七日堅座關論をなすが故小病弥留ふして將小南禅寺

よ飯り途中偈と説て曰

清風匝地果日當空 十方俱遍塞徧界没行蹤

泊然として示寂あり壽六十八荼毘して舍利を得る事算

なりと云

偽籠居後基經廻諸州

催無禮溝密謀鎌倉

亦元亨二年の春の頃より中宮御懷妊御祈とて諸寺諸山の貴

僧高僧ふ仰きて様くの大法秘法を行ひし中にも法勝寺圓觀

上人小野の文觀僧正の二人ハ別勅を承つて金闕小壇と構へ玉體

近づき奉り肝膽と碎きて祈申されり佛眼金輪五壇の法一

字五及孔雀經七佛藥師熾盛光鳥芻沙摩變成男子の法五

大虚空藏六觀音六字河臨河利帝母金剛童子八字文殊普賢延

命の秘法を呪して護摩の烟ハ内苑小滿振鈴の音ハ掖殿小響言そ

何なる惡魔怨靈も障礙と成がごとく見たりるケ様小功と積日

と累て御祈の丹滅と盡されれども三年まで曾て御産の御事ハ

がかりたり後ふ其子細と尋ゆれ鎌倉凋伏の為小事と中宮の

御産小寄てケ様小秘法と修せられりと聞へし其頃奥州安藤

五郎季長といふ者たり其一族又太郎季方と云者と爭論在て二

人とも鎌倉小祈訟す高時の重臣長崎圓喜入道路と貪て事

と果さる。季長季方其無道と憤り速に國に歸り一族立別れて
合戦し及ぶ。長崎圓喜此由と聞て高時は達し在鎌倉の兵と
遣して是を征せしむ。安藤季長これに驚き安藤季方と和睦と
調へ藤の一族心と合して鎌倉の討手と拒み國境に岩を築きて手
つて防ぎ戦ふ。鎌倉の兵卒案に相違し克を取事不能して早く
奥州より引返す。因茲て長崎が政道の横逆なるを怨る輩陸奥の安
藤を始め摂州の渡邊紀州の安田大和の越智等。鎌倉の弓箭恐
ろくに及ばずと慢て其下知ふ不隨者頗る多し。君此趣を獻聞在て
益御志と決しり。此時は乘て御宿意と遂うんと思食くれと
も事多聞ふ及む。武家小漏聞んと憚りし。潜く日野中納言
資朝卿同右少弁俊基朝臣尹大納言師賢卿四條中納言隆資
卿平宰相成輔卿等小仰合されてさうねべに兵を召れり。足助

次郎重範錦織判官代俊政とくめし。南都北嶺の衆徒少
く勅定ふ應じてたり。其中は俊基朝臣ハ累葉の儒業と繼て。
才學優長成り。は顯職に召仕られて。官蘭基に至り。身職事
と司り申されり。然り間出仕事繁りて。籌策とめぐらす小隙
あり。何れもして暫く籠居し。義兵の計畧と回さんと思ひ
煩ひ申さる。雲山門横川の衆徒款状と捧て禁庭に納り事
て。俊基其奏状と披きて讀申されり。心小屹と計と案し讀誤
る侍り。播磨院と慢嚴院とを讀りり。座中の諸卿袖と曳
目と合て相の字と篇ふ付り。作ふ付り。目とを讀べり。と
一同小掌と拍てぞ笑されり。俊基大に耻る氣色して面と赤
めて退出し。夫より恥辱に逢て籠居すと披露し。半平あり出
仕と止む。潜く山州の形小身をやつして。先大和河内小立越高山大

澤と一覽し軍營要害の地理と察し東國西國ふ下て土地の風
 俗人氣の優劣すハ民村の多少と窺ひ忍中よ都へ立及て尚も
 軍畧とめざりこれり。爰ふ美濃國の住人土岐伯耆十郎頼貞多
 治見四郎次郎國長と入者なり。共小清和源氏の後胤として武勇
 の聞へたりれば資朝卿様くと縁とさして昵ひ近き朋友の交
 己ふ浅からざりけれども。是程の一大事と無左右知んこと如何ん
 と思われれば猶も能く其心と窺ひえらむに無禮溝とゆふと
 と始め申されり。其人數ふハ尹大納言師賢四條中納言隆資洞
 院左衛門督實世藏人右少弁俊基伊達三位房游雅聖雅院廳
 法眼玄基足助次良重範多治見四良次郎國長土岐伯耆十良
 頼貞錦織判官代俊政等なり。其交會遊宴の体見聞耳目
 と驚やも。獻盃の次弟上下とす。男ハ烏帽子と脱て髻と放



ち。法師ハ衣と不著して白衣となり。年十七八の女の形優小膚殊
小清らうなりと二十余人編の單計と著て酌と取とくれハ雪の肌透通
として大掖の芙蓉新水と出る小異らう。旨酒と泉の如く小湛
玕味と岳の如く小積て遊戯し舞歌ふ其間ハ唯東夷と滅すべ
企と終ずるの外ハ他更らあり。其事とろく常に交會せし人の
思答むることもやうんとて。事と文終小寄がとれ小其頃才學の聞
へりり。玄慧法印と清とて。韓昌黎文集と講終とて行とせらる。
彼法印ハかゝる謀叛の企とハ夢もあはれ會合の日毎席小隠んで
玄と終じ理と折とて辯と震ひたる。然るに彼文集の中ハ昌黎
赴潮州とろく長篇有り。此處小至て終義と聞人々是皆不吉の
書なり。吳子孫子六韜三畧をんと社とろくべき當用の文をれとて
昌黎文集の講説と其終小止てたり。玄慧法印ハ事の子細とろく

されハ不興して退出とせとる。

按ハ韓昌黎名ハ愈字ハ退之晚唐の季小出て文才優長の人なり。詩ハ杜子美李
白小肖となく。文章ハ漢魏晋宋の間ハ傑出す。昌黎ハ猶子小韓相といふ者ハ
是。此人昌黎小似して文字と嗜す。詩篇ハも携らず。唯道士の術と學びて無為
と業とし。無事と樂しむ。或時昌黎韓相小向て教諭して申々ハ汝天地の間ハ
化生して。仁義の外ハ逍遙す。是君子の深く耻處小人の專を處り。我常ハ
是と歎する。と切なり。韓相大ハ笑て曰仁義ハ大道の癢らる處小出學教ハ天
偽の起時小盛なり。吾無為の境小優遊して是非の外小自得す。これハ真
宰り臂と掣て壺中ハ天地と藏し。造化の工と奪て橋東小山川と峙り却て
悲むくハ公の只故人の槽拍と甘して。空くく一生と區々の中ハ誤らんこと
と。昌黎曰汝ハ言處我ハ言信。則今造化の工と奪ことを得てんや。韓相
更ハ不答して。面前小つる所の瑠璃の盃と打覆て。醜て又引仰向ると
これハ忽小碧玉の牡丹の花の嬋娟とる一枝有り。昌黎驚て是と看ふ。
花中ハ金字小書ハ一聯の句有り。其句小曰雲橫秦嶺家何在雪擁

藍關馬不前。昌黎奇異の思となして是と續一唱三嘆する。此句優
美遠長なる體製而已有て其趣向落着の所を知りし手に取て是と見
んとすれハ。忽然として消失ぬ。是よりして之を。韓湘仙術と得たりと天下
の人ふあはれり。其後昌黎天子の佛舍利と崇信し之と排。佛骨表
と奉て浮圖の法と破り。儒教と尊むべきと奏し之を天子逆
鱗在て官と貶し。潮州に遷る。途中日暮馬泥て前路程遠し遙
小故郷の方と顧みれば。秦嶺小雲横とて來りし方も不覺悼で
万仞の嶮きよ登らんとすれハ。藍関小雲滿て行へる路の末もなき。進
退歩と失りて忙然とイミ頭を回し何より來りともなき。韓湘勃
然として傍ふり。昌黎悦ひて馬より下。韓湘手と執泪と溢りて
申々ハ先年碧玉の花の中に見へりし一聯の句ハ。汝我小預め左遷
の愁と告知きり。今又汝爰に來り事。料り知ぬ我逐小滴居小憂
死して。及り事得ざるをへし。再會期るべし。遠別今より。豈悲
し堪んやとて前の一聯小句と續て八句一首と成て韓湘小其ふ

天長一廿

一封朝奏九重天。夕貶潮陽路八千。
欲為聖明除弊事。豈料衰朽惜殘年。
雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。
知汝遠來須有意。好收吾骨瘴江邊。
韓湘此詩と袖し泣く。東西小別ふり。今玄慧が溝終と聞くる人
の思思ひ々の承久小後鳥羽院。柳隱謀の所企空しくして遠國小
遷る。今や。銘々隱謀と思ひ立所小。昌黎潮州に遷る事
と聞て物始のつきと忘る。思ひ々の小こせ

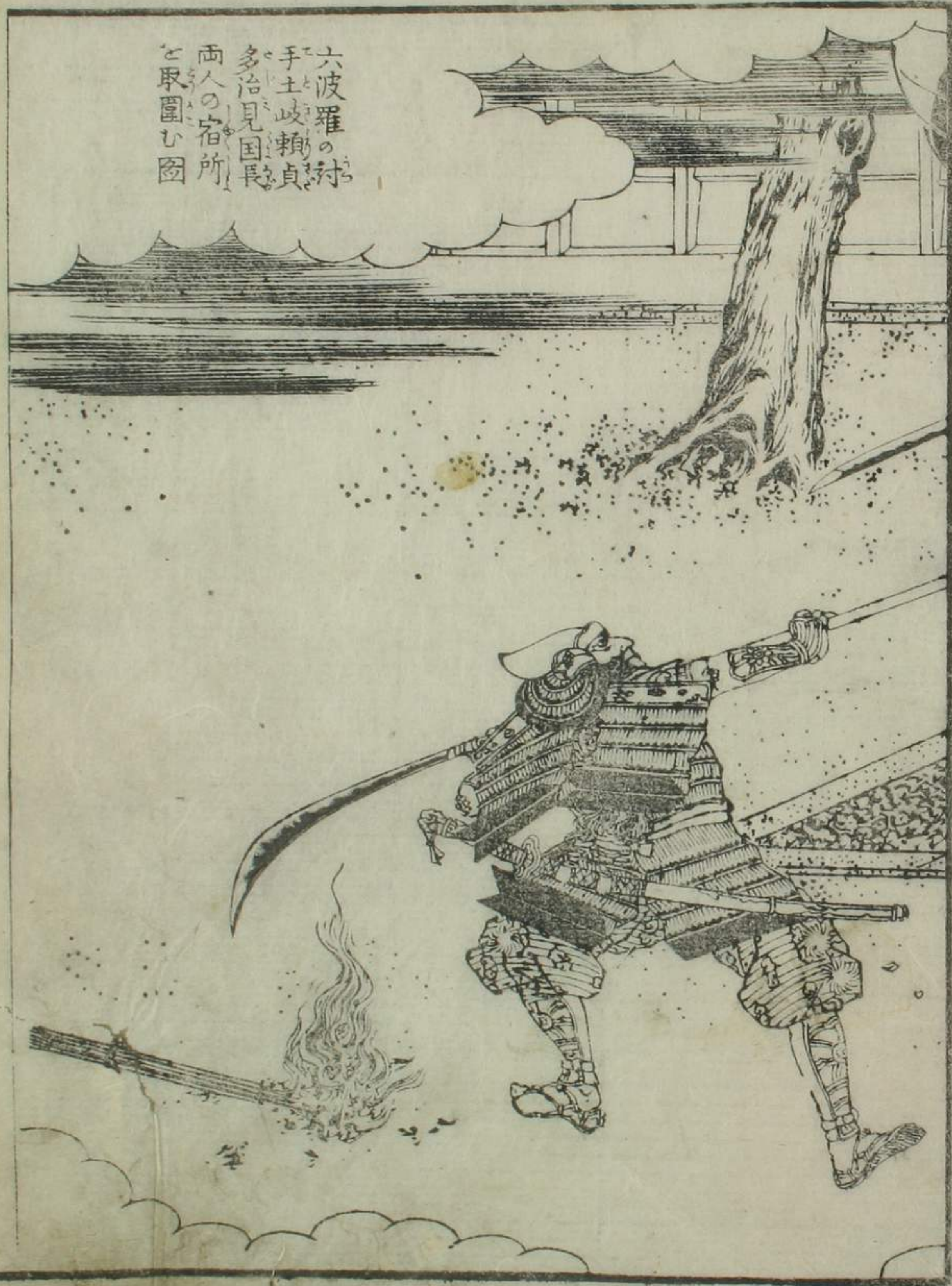
曳愛情頼貞變心
頼貞國長死急軍

柳隱謀小黨し奉る輩。追く小多う々々中。土岐左近藏人頼貞と
り者なり。六波羅の奉行齊藤太郎左衛門尉利行が女と嫁て愛
情最深り々々。情事と按ずるに世上乱て合戦も。千ふりも
討死すとり人事つらと。思へ。魚て餘波や惜り々々。或夜寢費

の物語に樹の陰に宿るおれは流と汲も皆是多生の縁浅からず況や
相馴て己は三年の餘を寺開きぬ志の程ハ氣色に付折し觸ても
知りしん去りても定むるは人間のちひ相逢中の契をば今若
我身もあう成ねと聞ゆ事わら無ん跡も貞女の心を失ふ
わて我後世を問ひて人間に帰らば再び夫婦の契を結び浄土に生
同蓮の臺に半座を分て待べしと其事となく泪を流してかき口
説くれば女はつくと聞てわれ怪しや何事の侍ぞや明日その契
の程もあはぬ身よ後世までの荒増は忘んとての情こそ侍ら
さしてはかぬ事を宣ふしとも覺ずしてさめくと泣恨ひさる
よ淀問くれば男ハ心浅うて去はし我不慮の勅命を蒙り君よ
憑れ奉り間辞するに道をよして御謀叛典にゆる上は千ふ一も
命の生んずる事難くれば無端存する程よ近づく別の悲しき堪

兼てケ様よハ申さる。穴賢此事人よ知さるゆゑ能く口を堅めて
同床よぞ所さる。此女房心の賢き者也くれバ夙よ起てつづくこの
事と思ふ。君の御隠謀事をよすば憑る男忽ちは殊もるべし若事
成就して武家亡びをば我親類雅々一人生残るべき。さば此一大事を
父利行よ語ると藏人殿と回忠の者とをし。男を助け親類を救ふと
思ひ急ぎ父が許よ至り忍ずよ此事を告ぐれを齊藤利行大に驚
き臆て頼負と呼寄斯く不思議を承り。誠しそゆゆん今の世ケ様
の事思ひ企めんハ偏よ石を抱て淵よ入と申者よとゆべし若他人の
ロより漏るを我等よ至りやぞ皆殊もるべしをいへバ利行急ぎ六
波羅殿へ泰アそ御邊の告知せらる由を申て共よ其咎を遁申じ
何が思ひゆると問くれば是程の一大事と女よ知する程の心しるじ
りて仰天せざるべし色とらしきて恐戦慄此事ハ同名頼貞多治見

六波羅の討
手土岐頼貞
多治見国長
両人の宿所
を取圍む圖





國長が勸ふ依て同意仕て只鬼も角も身の咎と助る様子計
ひへと申る。夜未明に利行急ぎ六波羅へ参りて。事の仔細を委
く言上申くれむ。則時を如くお鎌倉へ早馬を立速く京中雑外の
武士共と六波羅へ召集りて。先著到とぞ付られくる。其頃摂津國
葛葉とくろ所。地下人代官を背きて合戦及ぶ事なり。彼本所の雜
掌と六波羅の沙汰として。庄家に仕居んとす。四十八箇所の算是在
京の兵と催りて由を披露する。是は謀叛の輩と落すとす。謀入。土岐
頼貞も多治見國長も。吾身の上と露あらず。明日ハ葛葉へ向ふべしと
其用意して。皆己が宿所よこを居りくる。去程に明れば元徳元年九
月十九日の卯刻に軍勢雲霞の如く六波羅へ馳参る中にも小串三
郎左衛門尉範行山本九郎時綱御紋の旗と給り。討手の大将と承て
六條河原へ打出。五千余騎と二手に分て多治見國長が宿所錦小路

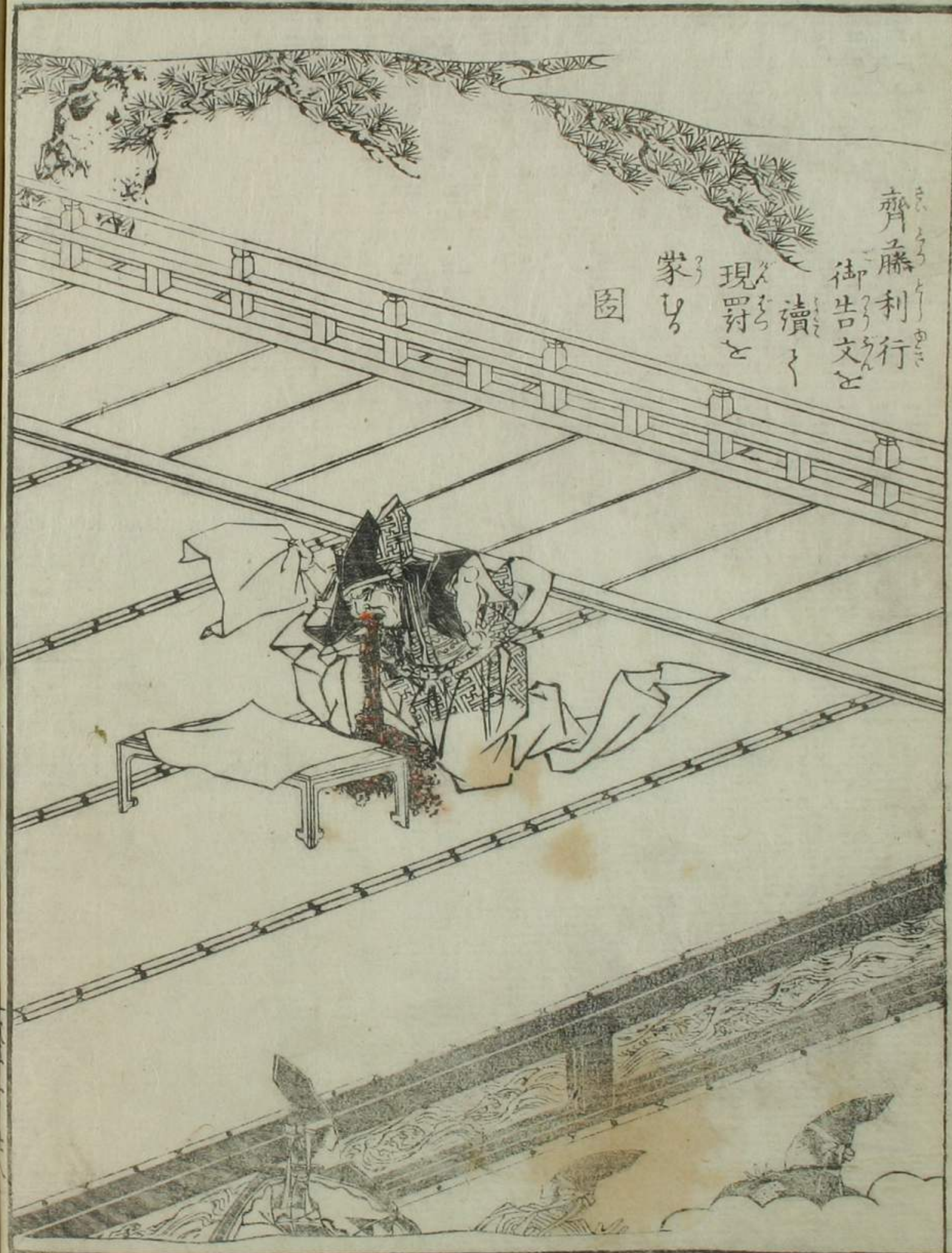
高倉土岐頼貞が宿所三條堀川へ押寄くるが。山本時綱かくて如何様
事も大事の敵と打漏すべしと思ひくれ。態と大勢と三條河原に留て
自分唯一騎中間二人に長刀持て。刃びやり土岐が宿所へ馳由る。
門前小馬を乗せて。小門より内へつと入て。中門の方と見れば宿直の
者よと覺て。物具太刀を枕に取散し。高艷鮠とて寢入り。廐の後
と回て何より匿地やうと見廻す。後ハ架地して門より外ハ路もは
扱ハ心安しと思ひて。客殿の奥より二間を颯と引明され。土岐頼貞只
今起上りてと覺て。髪髪を撫揚て居りくるが。山本九郎を屹と見
て心得るとりし。俣ふ。太刀を取より早く。傍を障子と一間踏破
六間の客殿へ跳り出天井に太刀を打附と拵切を切りくる。山本
時綱ハ態と敵と廣庭へ帶出し透間もろを生虜んとす。打拵
て退き受流してハ飛のき。人支りや。戦ふ所。後陣の二千余騎二の

関り込入て同音小鬮を作てくる。土岐頼貞と見てかく久く戦
う。我カ勞れろをも中く生捕れんとや思ひん。本の寢所へ走帰。腹
十文字よかき切て北枕をそけりくる。中間に寢る。若黨等も思
ひく小討死し一人も遁ぐ者なきりくる。山本時綱ハ頼貞が首
を取て鋒よ貫ゆる。勝鬮を作て直ち六波羅へ馳返り又多治見
國長が宿所へハ小串三郎左衛門範行と大将として三千余騎。彼宿
所と追取圍之時ととを揚りくる。國長ハ終夜の酒に沈酔して
前後もあらず所よりくる。時の声よ驚きさて。是ハ何事の出来くるや
と周章騒ぐ。傍よ所より遊君物馴る女もりくる。枕をり鎧取
て打着せ。上帶強く縮さきて。猶寢入る者共と起り叫りくる。
小笠原孫六遊君よ驚きされて。太刀かの込で中門よ走り出目と磨
く四方と吃と見つる。車輪の旗一流築地の上より見へりくる。

孫六よ立返り大音揚て申くるハ。此間の御謀叛早くも顯れ
と覺て。六波羅より討手の向うていひくるぞや。面く太刀の目貫の堪
ん程ハ切合て討死せんと呼ぶて。腹巻取て肩よ投懸二十四さくる。胡
縁よ鬘藤の弓を提て門の櫓へ走り揚り。狭間の板と八文字よ押排中
差とらて打番い。何れここのの大勢や。我等が手柄の程を顯れ
くれ。抑打手の大将ハ誰と申人の向うていひん。近寄て箭一請て脚
覽いへとく儘よ。十二束三伏忘りげり。引絞めて切て放つ。真先よ進
む。狩野下野前司が若黨。衣摺助房とり者。の真甲より鋒付の板
や。矢先白く射通れ馬より倒れ落りくる。是と始りて鎧の袖
又ハ草摺胸板も。不言指引結射くる程。面よ立る。兵二十四人
矢の下よ射て落し。今一筋胡縁よ残る。矢と手よ取て。胡縁と摺
の下へかきと投捨。此矢一筋ハ冥途の旅の用心よ持べきなりとて。腰

の間へ差をこみ。日本一の剛の者が御隠謀ふ典一奉て。自害する有様と見置人ふも活れと高声ふ呼もつて。太刀の鋒と口も呼へく槽より倒ふ飛落て貫やれてぞ死しりり。此間多治見國長と始として一族若黨二十餘人物具ひしくと堅め大庭ふ跳出く。門の関の木差狭く入来敵と待懸り。寄手大勢なりとどども思ひ切る者どもが死狂ひんと引籠る氣色ふ怖て内へ切て入んとする者もなかりたる処ふ。伊藤彦治郎父子兄弟四人。門の扉の少破る所より腹這ふ成て俛出入りり。志の程ハ武いとども待續る敵の前へ這入る事なれば。刀を合すやせもう。皆門際まで討れりり。寄手是を見て彌近づく者もなかりたる間。かてハ果と多治見國長。門の扉と推開きて。討手を承る程の人達のさしちりも見へられぬ者哉。早く是へ御入ひへ我等が頸共引出物

不進べいと耻めてこそ立ちりり。寄手ハ敵ハ飽やせも欺むれて。大腹立先陣五百余人。馬と乗放ちて歩立と成喚て庭へを込入る。楯籠二十四人の兵。逆も遁れと思切る事をなれば。一足も引べさや。大勢の中へ乱入面もろ守切て廻り。先驅の寄手五百餘人散くふ切立られ門より外へ廻と引。されども寄手ハ多勢なれば。先陣引ハ二陣懸入。二陣追出さる時ハ三陣懸入辰刻の始り。午の刻の終り。やて。火出る程ふ戦ひくれども國長が手の者少しもひりませ。追手の軍強くれバ。佐々木佐渡判官手の者千余人を率し。錦小路を在家と打破り後より乱入。國長も數箇所の手と負されバ。今ハ是やてとや思ひ久。大手の門と打固め。中門ふ並居て二十餘人の者も互に差違へ差違へ筭と散る如くみせ所よりり。追手の寄手差堅めり。門と打破。其間ハ搦手の者ども早首と取て。共ハ六波羅へ引及す。



三時計の戦の下手負死人を數ふる二百七十三人とぞ聞へる

資朝俊基下向鎌倉

續御告文利行家罰

土岐多治見討ちて後君の御謀叛次第を隠れりければ鎌倉より長

寄四郎左衛門泰光南條治郎左衛門宗直二人上洛して五月十日忽

ち日野資朝卿同俊基朝臣兩人を召取奉り土岐多治見が討ちし時

生虜の者一人もをかりしむば拷問すべし様もをくれれば我等が事へも

頭つれじと無墓憑し油断し曾て其用意もちておつりければ家内

一族東西に逃迷ひて俄に身を隠す所なく財寶衣類は大路に散

されて馬蹄の塵とぞ成ふり。彼資朝卿は日野の一門して職大理を

經官中納言ふ至り君の御覺へも他ふ異して家の繁昌時を得と

り。又俊基朝臣は身儒雅の下より出て望勳業の上より達せしむ

同官も肥馬の塵を望み長者も殘盃の冷み随ふ然る今夢の中み

樂しむるを眼前の悲しむ云ふ来り。彼を見是を聞人ごに盛者必

衰の理と知も不知も皆袖とをかり得ず。同廿七日東使長崎泰光南條

宗直の兩人ふ六波羅より齊藤太郎左衛門利行と差添資朝俊基

と具足し奉りて鎌倉へ下著す。此兩人は殊更謀叛の張本をれば聽く

珠をれりて憤へしりとも。俱に朝廷の近臣として才覺優長の人より

いふ世の穢し君の御憤を憚て。嗷問の沙汰も不及。只尋常の

放囚人の如くして侍所を預け置れり。君ハ事の漏るるに膽を冷

さすの心安めずして忙然として月日を過さるる処に。七月七日に

をりぬ。今夜ハ牽牛織女の二星銀漢を渡つて一年の懷抱を解夜を

れば官人の風俗として竹竿を願の絲を懸庭前ふ嘉葉と列して

乞巧奠を修する夜をれども。世上開く時節をれば詩歌を奉り

雅人もも。絃管と調伶倫もも。適上川く月卿雲客も

何と云く世の中の乱を又誰が身の上より来りまりと。皆眉を顛りめ。
面を低く候はる。夜は深く時に君は誰もひと召れば。吉田中納
言を冬房以て御前に出れる。主上席を近て仰りらる。資朝
俊基囚れ。後に東風猶も未だ静か。中夏常踏危。此上は何ら
沙汰を致すんと。朕が心更に穏らる。如何して先に東夷を定む
べし。謀らんと。勅問しらる。冬房謹んで勅答しらる。臣は想ふ資
朝俊基の二人白状しらるも承りらる。此上の沙汰は及ばしと
存じらる。近頃東夷の行事は楚忽の義多く間に御油節に
宜し一紙の御告文を鎌倉へ下されて。相模入道
が念に静めむと申されるは。君も實も思食れん。是を
聽て冬房書と仰りらる。則ち御前に草案を認め。是を
奏見せらる。君且睿見在て。御泪の告文ははらとかせらると。

御袖に押拭らるは。御前にひひる老臣皆悲啼を含める者はを
々。頭で萬里小路大納言宣房卿と勅使として。此告文を関東へ下さ
れる。宣房卿鎌倉に着りて。即ち殿中に至り。勅諭の趣を伸て告
文を賜ひらる。相模入道秋田城介を以て御告文を清取則ち披見
せんとあらると。二階堂出羽入道道蘊席と進んで。甲の
自古天子武臣に對して。甬書告文を被下らる事は。和漢共にいはれ
其例を承りらる。既に正應中龜山上皇御誓詞の事は。いとも
先君貞時速ふれと及献し。今君を受りし時は。君臣上下
の禮を背く而已にふらず。冥見を付て其恐ろも。唯に敢ずて宜く都
小還し奉り。事を静謐に執行しらるべしと申されるも。高時敢てこれ
と用ひ。何ららる。齊藤太左衛門尉利行に命じてこれ
と奉て讀進せらるは。睿心不偽處任天照覽と被遊らる文を至つて。

利行俄（ちやう）は眩（くら）血影（ちやう）く流（なが）れて瀆終事（しつ）ならず。家（いへ）も及びて其日（ひ）より
喉下（のど）に悪瘡（あくそう）を生（な）じ。七日（しち）の中（ちゆう）に血（ちゆう）を吐（つ）てこそ死（し）しと云（い）ふ。時（とき）澆季（じやうき）
及んで道塗炭（みちぬり）に落（おち）ぬと云（い）ふ。君臣上下（きんしんじやうげ）の禮違則（れいゐじゆく）は流石（りやうし）神侍（かみ）の
罰（ばつ）もつらりと見聞（けんもん）の人（ひと）毎（まい）に懼（おそ）れぬと云（い）ふ。何（なん）様（さま）資朝（しやう）俊基（しゆん）
の陰謀（いんぼう）。睿憲（えいけん）より出（い）し事（こと）を六（む）級（きゆう）の所告文（しよこぶん）を下（くだ）し置（お）くると云（い）ふ。其
の依（よ）べからず。主上（しゆじやう）と遠國（えんこく）へ遷（うつ）り奉（ほう）べしと已（ま）に評定（ひやうてい）一決（いつけつ）しと云（い）ふ。
勅使（ちやくし）宣房（せんぱう）卿（きやう）の申條（まへぢやう）。實（じつ）もと覺（おぼ）ゆる上（かみ）。所告文（しよこぶん）と瀆（しやく）と云（い）ふ。利行（りやう）俄（ちやう）
血（ちゆう）を吐（つ）て死（し）しと云（い）ふ。驚（おどろ）き。諸士（しよし）皆（みな）舌（した）と巻（ま）口（くち）と閉（し）。相摸（さうも）入道（にゅうだう）もさか
天憲（てんけん）其（その）憚（たふ）りやうと云（い）ふ。御治世（ごぢせい）の御事（ごじ）ハ朝議（てうぎ）に任（ま）せ奉（ほう）り上（かみ）ハ武家（ぶけ）
より綺（き）ひ申（ま）へさふ非（ちが）はずと勅（ちやく）答（た）へて告文（こくぶん）と返進（へんしん）せり。宣房（せんぱう）卿（きやう）帰（かへ）
洛（らく）在（あ）て此由（このよし）と奏（そう）し申（ま）されり。衣襟（えきん）始（はじめ）に鮮（あざ）みの群（ぐん）臣（しん）色（いろ）
とぞ直（ただ）されり。去程（さるほど）に俊基（しゆん）朝臣（てうしん）ハ罪（つみ）の疑（うたが）ひと輕（かろ）くして赦免（しやくめん）せ

られ。資朝卿（しやうてうきやう）ハ死罪（しつざい）一等（いちとう）と宥（ゆる）めり。と云（い）ふ。陰謀（いんぼう）の張本（ちやうほん）と云（い）ふ。憎（にく）
む。仇渡國（きゆうたうこく）へを流（なが）されり。

主上行幸南都北嶺

中原章房横死清水寺

元徳二年二月四日行事辨別當萬里小路中納言藤房卿を召れて来
月八日東大寺興福寺へ行幸すべし。早供奉の輩（たぐひ）に簡申（かんま）へさ旨（たま）仰
出（い）されり。藤房（とうぱう）古（ふる）と尋例（じんれい）と考（かんが）へて。供奉（こうぶ）の行粧（ぎやうしやう）路次（ろじ）の行列（ぎやうぎやう）と
定（さだ）む。仇（きゆう）木備中守（きゆうもくべいちゆうしゆう）廷尉（ていゑう）に成（な）て橋（はし）を渡（わた）し。四十八箇所（しよじはちやくわんしよ）の篝甲冑（かきかぶ）と
帶（おび）し。過（か）すと堅（か）む。二公九卿（にこうきゆう）相從（さうじゆう）ひ百司千官（ひやくしせんくわん）列（れつ）と曳（ひ）言（ごん）語（ご）同新（どうしん）の嚴（げん）
儀（ぎ）より。抑東大寺（おさむらうだいてう）と申（ま）ハ聖武（せいぶ）天皇（てんかう）の御願（ごがん）。閻浮（えんぷ）第一（だいいち）の盧舍那殿（ろしやな）
興福寺（きふくじ）と申（ま）ハ然海公（ぜんかいこう）の御願（ごがん）。藤氏（とうし）尊崇（そんじゆう）の大伽藍（だいからん）を代（しろ）の
聖主（せいしゆ）も皆結縁（みなむすぶ）の御志（ごし）ハ御座（ござ）くれども。一人（ひとり）出（い）り人事（にんじ）容易（じゆんぎ）め。され
バ多年（むねとし）陰幸（いんきやう）の儀（ぎ）もたゞ所（ところ）ふ。此（この）代（しろ）代（しろ）ふ至（いた）りて絶（た）ると継（つぎ）。瘞（しやく）と云（い）ふ。



興して鳳輦を廻し、のりて。衆徒歡喜の掌と合せ、靈佛威徳の光
を添え、されば春日山の嵐の音も今日より、八萬歳と呼々と奇すれ北の
藤波千代りけて花さき春の陰深し。又同じく三月の二十七日、北嶽山
へ行幸成て大講堂の供養あり。彼堂と申、深草天皇の御願大日遍
照の尊像なり。中頃造營の後、ゆが供養を遂られおして、星霜已ふ
積りて、たゞ、毫破れてハ霧不祈の香と焼、扉落てハ月常住の燈と挑
ぐ。されば満山敷きと年と経る處に、忽ちりに修造の大功と遂られ速
小供養の儀式を調へ給ひしを、一山眉を開き、九院首と傾り、御導師
ハ妙法院尊澄法親王、御願ハ時の座主大塔尊雲法親王、少てそ御座
り。御揚瀆佛の砌ハ、鷲峯の花董と譲り、歌唄頌徳の所ハ、魚山
の嵐響を添、伶倫過雲の曲と奏し、舞童回雪の袖と翻へて、靈輦
も出現し、鳳鳥も来儀する計あり。住吉の神主津守國夏大鼓の

役して登山あり、宿坊の柱、一首の歌とを書付たり

契りれむ此中よも、阿耨多羅三藐三菩提の種や植えん

是ハ傳教大師當山草創の古へ我立、拙み眞加り、をりくと、三藐三菩
提の佛達、祈りひし故事と思つて、讀る歌を、くし抑元身以後主
愁ひ臣辱し、められて、天下更み安き時、折節こそ多うりに、今南都
北嶽の行幸、願何事やんと尋れ、嘉曆元年、皇太子邦良親王
薨去し、ゆふ因り、主上のそふ、此度こそ朕が子を東宮よ、立べしと喜
び思召る處、高時を欲せず、後伏見院の御子量仁親王と立て
皇子と冊さ奉りし、主上の睿慮、ゆが不平と懐き、再び御座
謀と思召立ち、給ふといふ、蛮夷の輩ハ、武臣の命、順ふ者なれば、召
とも、勅し、應ずる、只山門南都の大衆を、語りて、東夷を亡すべし
との所結構り、此度の行幸ハ、仰出され、を聞き、依之大塔二品

とて狭きおのくハ何なる珍事出来りんと。今更御後梅御座
よして深く懼さるひくる。去程小章房ハ主上小直練を奉るの後
いさる宿願の子細つらと。四月朔日近侍下部四五人と具して洛東
清水寺へ詣りて指しめらる。まぐ咲残る花の梢に樹々の新葉枝さし
かゝりて青白色を交るる。春の名残も流石にこゝろにて往
事夢の如くと打まひつ。まぐかこ道遥大慈大悲の御前小漸
祈願と籠られ既小下向道小懸る。西の大門と出られらる。折
節松風小連く村雨のそお降くれむ。正八幡の御社小雨凌。社
壇小向りて額づらおろる。處小籠笠小佩刀しる。男一人其後
とすらと見へが。俄小太刀とす。とゆさ。水もさる。小章房が首
中よ打落し。太刀と小腕よめい狭き坂と真下より逸足はしてを
逃りり。供巡りの者共こハ如何よと周章ふりめ。適さじと追

懸りども何方へ行くん後かげと見へしり。詮すぐるくて連
と拵出て空しき骸と昇のせ。泣く宿所。坂と真下を便をられ
悲哉此日何なる日ぞや。正八幡の納受もく救世大士の加護も
らずして。さるも忠直の章房から殃難小つひゆる事。前世の因とや
いん。時の変とやいん。横死ハ世よつひ習ひをかり。皆人其賢才を
惜み如何なる意趣らつらんと怪し。牙とくれども更小其由と知
さし。が。數月と経て誰れとを。主上北條元明の密事を章房
一味奉らす。却て直練小及びし。若しや外小泄さんくと深く恐
れさる。の平宰相成輔卿小章房を失ふ。旨隠く小宣定つらる
ふり。成輔即ち洛東雲居寺のとなり小住り。溢者瀬尾兵衛太郎
とく者をかきひ引出物多くし。途中小りて章房をかきの如く殺
害小及びるを。其沙汰街小聞へら。章房ハ中原家一流の棟梁法

高時

兩

義助

五

直義

五

兵部

馬